

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

第5章 兼業農家誕生！

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会



兼業農家誕生につながるいくつかの縁

俵は長崎県対馬市の出身で、北海道の酪農学園（畜産専攻ではない）を卒業し、愛知県半田市のエル牧場に就職。縁あっての就職ではあったが、毎日作業をしているなかで、理想と現実の間の葛藤を否定できなかった。俵にはもともと北海道でペンション経営をしたという夢があったのだ。

「自分が本当にやりたかったことはこれなのだろうか？」

エル牧場に来て1年が経ったある日、俵は退職したい旨をエル氏に伝えた。話を聞いたエル氏は、「またか」と思いながら俵に言った。

「俵、俺も若者の夢を応援したい。ただな、今まで何人も北海道に憧れて出て行ったが、彼らが夢を叶えて楽しい暮らしをしているかといえばそうではない。夢破れて、その後苦労している人を多く見てきた。だから俺はお前を止めたいんだ」

「すみません。でもやはりこのままチャレンジしないで諦めてしまうのは嫌なんです」

エル氏はあれこれ言葉を積んで説得しようとしたが、俵の意志は変わらなかった。

「皆そう言うんだ。だから夢なのかもしれんな。じゃあ一つだけ約束してくれないか？ やると決めたら気のすむまで頑張れ。でももし仮に、自分の思いと違っていたり挫折したりしたら、必ず俺に連絡してこい。これまで学んだ酪農の知識や技術、俺との人間関係は消えるものではない。やはり社長の言うとおりでした、甘くはなかったです、でも何でもいい。俺はいつでもお前を受け入れるからな」

その言葉を背に北海道へと飛び立った俵。しかし半年して（短期間でさまざまなできごとがあったらしい）、彼はエル牧場に戻ってきた。今では本場の場長を任されるまでになっている。彼は素直だった。体裁が悪いと感じることもあっただろうが、約束どおりエル氏に連絡してきたからこそ、今があ

登場人物

エル氏：愛知県半田市の大規模酪農家（乳肉複合経営）。空き牛舎有効活用推進協議会誕生の立役者。「兼業農家」第1号を生み出す。

ヒデ氏：愛知県西尾市の大規模酪農家。最年長者として幅広い知識と経験から関係者間の調整を担う。

ヨシ氏：空き牛舎有効活用推進協議会事務局。かじ取り役として協議会を牽引。

マル氏：ヨシ氏の相談役として協議会運営をサポート。

キヨ氏：協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。

るのだ。そしてエル牧場の従業員と結婚し、2人の子どもにも恵まれた。奥さんは結婚後一度エル牧場を退職したが、1人目の子どもを出産した後、しばらくしてパートとしてエル牧場に戻ってきた。こうしたエル牧場との縁を大切に、2人は頑張っていた。そのなかで自分の牧場を持つことを漠然と夢見始めたが、最初の頃は本当に独立できるとは思っていなかった。

夢は身近なところにある

「俵、話があるから、奥さんと一緒に来てほしい」

ある日突然、俵はエル氏からこう言われた。空き牛舎有効活用促進協議会が兼業農家制について検討を進めていたとき、エル氏のもとに空き牛舎の物件の話が舞い込んできたのだ。正しくは、いくつかある物件の中で、兼業農家制を成功させる条件に合った物件ということだ。兼業なので自宅から近く、親農場とも近いこと。そして貯金の少ない若い子育て世帯でも手が届く金額。そういった条件をクリアしていないといけない。

「以前から自分達の牧場を持ちたいと言っていたらどう？ 良い物件があるんだ。もしお前らが買わないのなら、ほかの人に買われる前に会社で買う。夫婦で話し合ってみろ」

俵は思った。将来自分の牧場を、と思ってはいたが、子育ての真っ最中で金も時間もない今、本当に牧場経営などできるのか？ そんな俵の不安をかき消すかのように、エル氏が提案した。

「いきなり夫婦2人で独立するといっても不安はあるだろう。俵は俺の牧場に残って、まずは奥さんが牧場経営を始めたらどうだ。それもいきなり搾乳ではなく肥育から。肥育も俺の牧場で経験済みだから、なんとかなるんじゃないか」

俵夫妻は、さすがにすぐに返事はできなかったため、その後何日かかけて2人で話し合った。最終的には「夢は身近にあるのかもしれないね」という妻の一言が俵の背中を押し、夫婦で頑張ってみようということを決心した。

「これだけ条件が良い物件はなかなかないと思うので、話を進めていただけませんか？」

物件取得の調整をエル氏にお願いする一方、俵夫妻は新規就農の準備のため、県の普及員の指導のもと、借入金の相談やら経営計画の作成やら、今までしたことがない事務手続きを進めた。そしてついに平成30年5月、妻名義で牧場を取得し、6月にF1子牛8頭を導入。新たな「俵牧場」が誕生した。



俵牧場

兼業農家のメリット（俵牧場の場合）

その後52頭飼育を目標に、1カ月おきにF1子牛を4頭ずつ導入。

また肥育だけでは不足する経営開始初期の収入を補うため、空き牛舎有効活用推進協議会の提案を受け乳用牛の育成牛の預託を同時進行させた。エル氏とヒデ氏から子牛を預かり令和2年2月まで月14～15頭を育成してきた。

兼業農家第1号が誕生して2年。令和2年5月に肥育牛の初出荷があった。コロナ禍で相場が落ちていたにもかかわらず、優秀な成績だった。それを聞き、協議会事務局のヨシ

氏は自分のことのように喜び俵牧場を訪れた。

「聞いたぞ！ 枝肉がすごく優秀だったそうだね。順調に経営できているみたいで凄く嬉しい。サラリーマンでは経験できない金額が動いたでしょ？ 実際牧場を持ってみて今はどんな気持ち？」

ヨシ氏にこう聞かれた俵は、「正直今日まであっという間でした。突然の話で最初は戸惑いばかりでしたが、周りの皆さんのご協力のおかげでここまですることができました」と少し嬉しそうに言った。「肥育の成績が良いようだけど、それは親農場と同じエサと管理の仕方だから？」

こう聞くヨシ氏に俵が「エサは違うんですよ」と応えると、ヨシ氏は驚いた。

「1000頭管理するのと、50頭ではやはり違いますよ。でも飼料会社は親農場と同じです。営業の人もエサのやり方を親切に教えてくれます。それに自分の思ったことを試せることは、自分の牧場だからこそです」

なるほどと頷きながら、ヨシ氏は俵の妻に聞いた。

「経理は奥さんですよ。経営を始めて金銭面で感じたことは？」

「最初は誰に何を聞けばよいのかわからなかったです。今はいろいろな補助金などが入ってきて本当に助かっていますが、どういうルールでどのくらい入ってくるのか最初からきちんと勉強しておけば不安感も少なくなるし、借入金も抑えられたなと思いました」

新規就農者が誰でも最初に考えることについて、ヨシ氏はさらに突っ込んだ。

「借金を抱えることについてはどう？」

「牛舎の修繕は自分達でやったので初期投資は極力抑えられたと思いますが、それでもリフトとバケットで130万円、堆肥運搬車で260万円、車両関係だけでそれくらいかかっています。あと運転資金として、50頭くらいの素牛代で1300万円、飼料代で1000万円くらいは最初の2年で必要です。そのほか電気代、水道代なんかもありますし、正直不安はあります。肉牛だけで考えると最初の2年間は収入がありませんからね」



俵夫妻

「自分の牧場を持ちたい若者の一番の関心は資金面だからね」

「生活用の通帳と事業用通帳を分けたことで、旦那の給料があるので生活は今までどおりで不安はなかったです。それは兼業農家制の最大のメリットですね」

ヨシ氏は話題を変えた。

「休日についてはどう？ 俵は休みの日は自分の牧場手伝うんでしょ？ 兼業農家になると休みの日まで牛と関わらなきゃならないって感じになっちゃう？」

「牧場を持ちたい人は牛が好きだから、毎日牛の世話をしても心配ないと思います。それにエル氏が言っていたように、肥育だと今の頭数なら2人でやれば1時間かからない。用事があっても何とかできるし、体を休める時間も十分あります。もちろん親農場からの協力もあります。今年のゴールデンウィークには親農場から作業の手伝いに来てもらって、家族で連休を取ることもできました。こうして実際に自分の牧場を持って試行錯誤していくなかで、徐々に経営者という面でも慣れていくことができそうです」

若者たちに夢を与える

ヨシ氏との話の後、俵は家に帰ってから今後の経営の展開を夫婦で話し合った。兼業農家制のおかげで、完全に独立経営するか否かを考える余裕がある。今はまだ子どもも小さい。でも子どもが手離れする頃にはもっと牛を増やしていけると思う。敷地内で使っていない部分があるから、そこをきれいにすればいろいろと利用できる。近隣の農地が売りに出たら購入して規模拡大の基盤にもできる。不安はあるが、夢も広がる。夫婦の話は尽きない。

一方、俵夫妻はエル氏に大きな恩を感じている。以前そのことをエル氏に伝えたとき、エル氏はこんなことを言った。

「社員が幸せであればその会社には人が集まる。だから俵牧場が発展すること、俵家が家族円満であること、それが一番の恩返しだ。お前らを見て第2、第3の兼業農家が出てくるだろう。そうしたらノウハウをしっかりと教えてやってくれ」

協議会では「兼業農家のすゝめ」によって、エル牧場のような親農場や、俵牧場のような新規就農者がこれからも出てくることを期待している。道のりは平坦ではないが、その先には若者達の夢の実現が、そして地域の酪農の発展が必ずあると考えている。㊟

《つづく》

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

第6章 はじまりの街

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会



イラスト：愛知県刈谷市 清水牧場 宮田彩可

序文

愛知の酪農の発展のためには、酪農家個々の力をさらに向上させるとともに、新しい人材を確保することが重要です。そして、こういった取り組みを効果的に実践するためには、個人だけでなく組織の力が必要となります。しかし、ここでいう“組織”は決して堅苦しいものではありません。人々が集まって一つの街が形成されるように、酪農に対する個々の想いが合わさった集合体こそが“組織”となるのです。

空き牛舎有効活用推進協議会では、これまでさまざまな活動をとおして、酪農に関心のある人は、顕在的にも潜在的にもたくさんいるということがわかってきました。そこにはすばらしい才能が眠っていることでしょう。

百花繚乱。道のりは平坦ではないですが、これからも愛知には、そして全国の酪農業界には、美しい花がたくさん咲き続けると、われわれは信じています。

(舞台：東京都豊島区池袋)

はじまりの街

エル氏は池袋の居酒屋で、2人の仲間とビールを飲み交わしていた。時刻は夕方5時になろうとしているが、立春を過ぎたからか、少しずつ日の落ちる時間が遅くなり、外はまだ明るい。それでも昭和の佇まいが感じられる狭い店内は、すでに満席となっていた。

「やっぱり、いつものメンバーが揃わないと、何かしっくりこないな」

そう言いながらも、東京に来る前から行きたいと望んでいた雰囲気のに、エル氏は満足しているようだった。

「ヒデ氏に連絡しているけど通じない。何をやっているんだ」

ヨシ氏がぼやくとマル氏も、「僕もキヨ氏に、どこにいいのかメールしたのだけど、ちっとも返事が来ない」と同調した。

「まあまあ、じき来るでしょう。まだ時間はあるし、ゆっくり

登場人物

エル氏：愛知県半田市の大規模酪農家（乳肉複合経営）。空き牛舎有効活用推進協議会誕生の立役者。「兼業農家」第1号を生み出す。

ヒデ氏：愛知県西尾市の大規模酪農家。最年長者として幅広い知識と経験から関係者間の調整を担う。

ヨシ氏：空き牛舎有効活用推進協議会事務局。かじ取り役として協議会を牽引。

マル氏：ヨシ氏の相談役として協議会運営をサポート。

キヨ氏：協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。

りやりましょうや」

そう言うエル氏は、ビールのおかわりを注文した。

「ところで、農業人フェアに来るのはこれで何回目？」

「7回目ですね。5人が揃って参加するのは東京開催が今回2回目、あと大阪1回、名古屋1回ですか」

回数を頭の中で数えていたヨシ氏の真剣な横顔を見ながら、エル氏は、空き牛舎有効活用推進協議会の事務局として比肩するものがないほどの働きをしてきたヨシ氏と、協議会運営に関わる多くの人達に感謝をした。

「ブースに来てくれた人で、今まで何人かが愛知県に来て牧場体験をしてくれたけど、それもこれも自分の説明が上手だったからで、やはり人を惹きつける力が自分には備わっているんだよなあ」

エル氏がおどけると、ヨシ氏が、「さすがは越後屋。悪よのう」とからかう。

「いつも言ってるじゃないですか。越後屋じゃなくて、越後のちりめん問屋のインキョ」

エル氏とヨシ氏の大きな声が店中に響き渡り、何人かの客が訝しげな目つきを3人に向けた。

＊

「農業人フェア」に参加することになったきっかけは、2年前の初めての視察研修だった。酪農業界における人材確保の難しさを打破しようと協議会を立ち上げ、藁をもつかむ思いで北海道に飛び立った5人は、そこで出会った1人の農協職員から、酪農の魅力を喧伝して人の心を惹きつける、人心掌握術のようなものを教えてもらった。

考えてもみなかった手法に全員が一瞬鼻白んだが、それぞれが有する天性の好奇心と行動力が、すぐさま頭をもたげてきたのだ。それからわずか半年後に最初のフェア参加に至ったのは、遠い浜中の地で知り得たという“偶然”を、独自の酪農PR方法に昇華させた“必然”としての表れだった。

農業人フェアではさまざまな人との出会いがあった。出会いの大切さを北の大地で身に染みて感じている5人は、どのような人も宝石の原石のように思っていたが、ときにマル氏1人に対応をお任せするなど、適度な役割バランスを心がけながら、これまでフェアへの出展を続けてきた。

＊

ガラスのはめ込まれた店の引き戸が、風でガタガタ音をたてた。外は寒そうだが、店内には調理の湯気が充満し、別世界のように暖かった。

「そういえば、このあいだ妙な夢を見たんですわ」

おもむろにエル氏が語った内容は、次のようなものだった。

一暗い空から舞い降りてくる雪のかけらが、すでに真っ白に覆われている地面に音もなく吸い込まれていく。不思議と寒さを感じない。ふと、純白の世界の中である1カ所だけが、すみれ色に輝いていることに気づいた。その場所に近づこうとすると、誰かに後ろから肩をたたかれた。振り返ろうとした瞬間、目を覚ました。

「何でそんな夢を見たのか、よくわからないんだよ」

「夢占いで、夢にバイオレットカラーが出てくるといというのは、直観力や芸術的な感性が高まっていて、何かやりたいと思っていたことを始めるには良い機会である、なんて話を

聞いたことがありますよ」

朱顔のマル氏が豊富な知識を披露すると、感心するエル氏を横目に、ヨシ氏はそんなきれいな話ではないとばかりに言った。

「エル氏からバイオレットって聞くと、何か怪しげなイメージしか浮かばないよなあ」

3人は大きな声で笑った。

＊

ヒデ氏は池袋の街中を、エル氏たちのもとへと急いでいた。夕方の街には群衆が潮のごとく溢れていて、少し進めばすぐに人にぶつかりそうになる。まさに人波をかきわけながら、キヨ氏の背中を追うように歩いていた。

「キヨ氏は迷いなく進むねえ。本当にこっちでいいのか？」

ヒデ氏は辺りをしきりに見回しながら、真顔で目の前にある背中に問いかけてみた。

「自分は立ち止まるのが嫌いなので」

振り向きながら無表情でそう答えるキヨ氏にヒデ氏は、キザなところは昔から変わらないなあ、と思った。ほかの4人の中では一番付き合いは長い。

「みんな待ってますかね」

キヨ氏が小首をかしげると、「遅刻するのはいつも俺なんだよ。いかんよねえ」と、頭をかきながらヒデ氏は自戒した。

「長野に行ったときは、みんなに迷惑かけたなあ」

協議会で長野に行ったことは二度ある。一度目は、南信地域における酪農の新規就農の実態調査を目的としていた。

朝、名古屋駅に集合して松本まで電車で行く計画だった。駅に到着したヒデ氏以外の4人はそれぞれ、すでにホームに停まっていた名古屋始発の電車に乗り、指定の席に座っていたが、ヒデ氏がなかなか来ない。あまりにも遅いので一度電車から降りて、電話をしたり、ホームの階段から下をのぞき込んだりしたりして、ヒデ氏の到着を焦りながら待っていた。

刻々と出発の時間が迫っている。最悪の事態を覚悟したとき、皆が見ているのと反対の階段から、ヒデ氏が息を切らせながら姿を現した。全員駆け込むように電車に乗り込むと、座席に着く前にはもう電車が動き出していた。

あのときも、皆ホームに出てたのに、キヨ氏だけが電車の中にいたな。

ヒデ氏は、そのマイペースなところもキヨ氏らしいと、心の中で思い出しながら笑った。繁華街の中心に入ってきて、飲み屋の勧誘や何かのチラシ配りの頻度が増えてきた。

「長野の夜は、松本駅前で飲んだんだっただけかな」

「そうですね。日帰りだったのでちょっと慌ただしかったです」

「そうそう、あのときユウナに初めて会ったんだよね」

ユウナは愛知県出身で高校時代にヨシ氏に知り合い、協議会のメンバーと会ったときは信州大学で酪農について学ぶ学生だった。

「二度目に長野に行ったとき、つまり八ヶ岳でヨシ氏がデビューしたときだったが、それは置いておいて」

とヒデ氏は苦笑しながら続けた。

「そのときユウナも学生たちに対して酪農に対する自分の想いを発表してくれた。それから1年もしないうちに、つまり来月だけど、彼女が俺の牧場に1週間酪農体験で来てくれる。楽しみだね」

ヒデ氏は少し感慨にふけた。さまざまなところで、さまざまな出会いがある。協議会の活動が、人の輪を広げていることは確実だった。

一瞬強い風が吹いた。2人は思わず身をすくめた。

「まだ寒さが厳しいですね。早く春が来ないかな」

キヨ氏が言うと、

「ユウナが来てくれれば、俺の牧場は一気に春になるんじゃないかな」

と、ヒデ氏が切り返した。キヨ氏は何事か考えている風で、少しの間をおいて言った。

「そういえば、彼女にはすみれの花のイメージがありますね。春の到来を教えてくれる可憐な花」

「おいおい。相変わらずキヨ氏は、なんかすごいことをさらっと言うなあ」

今度は心の中ではなく、思わず声を出して言った。

本格的な夜の訪れを間近に控え、西の空の端にはかろうじて黄昏の残光が漂っていたが、ビルの谷間の上空に広がる空の色は、いつの間にか深いすみれ色を呈していた。

＊

居酒屋でくつろいでいたエル氏は、ふいに後からポンと肩を叩かれた。

驚いて目を丸くしながらビールを片手に振り返ると、そこにヒデ氏の姿があった。その後ろにはキヨ氏もいる。

「おー、待ってました」

相手がわかったエル氏は、晴れやかにそう言って破顔した。

「申し訳ない。遅くなりました」

ヒデ氏が言うと、夜はまだまだこれからという顔つきで3人は笑った。

「とりあえず店を変えましょうか」

エル氏の一言で、5人は揃って戸外へ出た。

「ヨシ氏、明日の準備は万端かな」

歩きながらヒデ氏が問いかけると、当然だと言わんばかりにヨシ氏が即答した。

「いつもどおりやるだけです。東京のフェアは来場者も多いから、忙しいかもしれませんね」

「でもそのぶんいろんな人が来るから、楽しみだね」

ヒデ氏が言うと、4人は揃って首肯した。

「こういった協議会の活動を、酪農業界の発展にどうやってつなげていくか、それが今後の課題ですね」

その言葉に、事務局としてのヨシ氏の強い責任感を感じ、ヒデ氏とエル氏は応えた。

「協議会として、何か新しいことに取り組むことが大切だね。酪農に興味がある人は、俺の牧場でどんどん受け入れるから、若い人のアイデアを実現していけたらいいな」



「うちの牧場からは、まず実績を出さないといかんですわ。空き牛舎活用の独立経営第一号を目指します」

こういった個々の気概こそが、組織の原動力となる。

「あ、あの店はどう。エル氏の好きなジャック・ダニエルが似合う場所じゃない」

ヨシ氏が指さしたのは、バイオレットのネオンが輝く、小さな洒落たバーだった。

「雰囲気はいいけどおやじ5人はどうだ、いや逆にそれもありか」

「あそこは三次会くらいで行きましょう。とりあえず昭和のレトロな店をもう一軒」

まだまだ店はたくさんある。ヒデ氏とエル氏は、まるで店を選ぶこと自体を楽しんでいるかのようだった。

相変わらず街の中心は殷賑を極めていた。5人で歩いていると、そのうちの誰かは人波で必ず見えなくなる。でもどこかの店の灯を探しながら、皆が同じ方向に歩いていることは確かだった。

スクランブル交差点の赤信号で、人の流れが止まった。そのとき突然、どこからかコミカルな曲が流れはじめ、多くの顔がその音のする方向に向いた。5人もそちらを見ると、派手ないでたちをした路上パフォーマーが、歩道の一隅で操り人形のような踊りを披露していた。毛糸の帽子をかぶり、厚手の古びたコートを着た中年の男性が、その目の前で手拍子をしている唯一の観客だった。

周囲にはまるで蔑む^{さげす}かのようなまなざしが多い中、5人にはそれをからかう者も、煽る者も、無視する者もいなかった。わずかの時間ではあったが、誰も言葉を発することなく、それぞれがそれぞれの思いを抱えながら、その光景をながめていた。

ほどなくして信号が青に変わった。空はすっかり夜の帳につつまれていたが、地上にはあらゆる色の光があふれている。5人は前を向くと次の場所に向かって、誰からともなく、それぞれの一步を踏み出した。📍

《つづく》

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

第7章 インターンシップ生がやってきた

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会



イラスト：愛知県刈谷市 清水牧場 宮田彩可

若者達との交流に向けた第一歩

兼業農家制の構築に向けた活動と並行して、空き牛舎有効活用推進協議会では、若者達に酪農をPRしていく取り組みを地道に重ねていた。その一つが、ヨシ氏が歌手デビューしたハヶ岳中央農業実践大学から始まった大学の授業の一環として行なう酪農講座である（本誌2020年12月号、第4章「ジャックに捧げるバラッド」参照）。

ハヶ岳で味をしめたヨシ氏が先陣を切って行なう「あなたを牛好きにする魔法の歌」というステージ、いや講座で学生の度肝を抜く。次にヒデ氏とエル氏が自らの考えや経験を熱く語る。内容は、牛の飼い方、エコフィードのこと、6次産業化のこと、都市近郊酪農の特徴、お金のことと多岐にわたる。そして最後に県の職員が締める。

なんだこの講義は！と思われようと、愛知県から面白い連中が来たという印象を強く持ってもらえれば、協議会のメンバーにとっては本望であった。

日本獣医生命科学大学で酪農講座を行なった夜、学生と協議会による懇親会が開催された。講義では会話が一方通行になりがちのため、酪農家2人は学生達とリラックスムードで話すことができると、とても楽しみにしていた。

エル氏は参加した学生達に問いかけた。

「将来はどんな方向へ進みたいのかな？」

学生達は思い思いに自らの考えを述べた。

「牧場に就職希望です」

「ゆくゆくは自分の牧場を持ちたいです」

エル氏はうるうるしながら応えた。

「こんな嬉しいことはない。君も？ 君もか？ 若い世代が酪農業界に入ってこうとしているなんてまったく驚きだ。よし、とにかく卒業するまでに一度は愛知に来い。めちゃく

登場人物

エル氏：愛知県半田市の大規模酪農家（乳肉複合経営）。空き牛舎有効活用推進協議会誕生の立役者。「兼業農家」第1号を生み出す。

ヒデ氏：愛知県西尾市の大規模酪農家。最年長者として幅広い知識と経験から関係者間の調整を担う。

ヨシ氏：空き牛舎有効活用推進協議会事務局。かじ取り役として協議会を牽引。

マル氏：ヨシ氏の相談役として協議会運営をサポート。

キヨ氏：協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。

ちゃうまい牛肉食べさせるから！」

そう言うエル氏は名刺を取り出して学生達に配った。

「これで君たちは愛知県フリーパスだ」

こうして武蔵境の夜は更けていった。

＊

それから数カ月後、ヨシ氏のもとに、日本獣医生命科学大学の先生から、次の春休みにインターンシップの受け入れが可能かという問い合わせがあった。それを受けてヨシ氏はエル氏と打ち合わせをすることにした。

「学生達にうまい肉食わせるから愛知に来いや！と言ったのはあなたですからね。ちゃんとインターンシップ受け入れの体制を整えてください」

そう言うヨシ氏にエル氏は「そうだな。本心からそう言ったんだが、実際に受け入れようとするといろいろ課題はあるんだよな。妻は病気を抱えていて学生の食事などのお世話はできないし、牧場に宿泊できる場所もないんだ」と少し困った顔をした。

ヨシ氏は「確かに宿泊場所は課題ですね。でもお昼は牧場の弁当があるし、朝夜は自炊でなんとかするんじゃないですか」と言った。

「自炊でいいなら、その間だけアパートでも借りるか、ビジネスホテルでもよいのかな？でもなんとなくつまらんな」

エル氏はそう言いながらふと思った。そういえば、両親の家が耐震基準に引っかかったから隣に新しく家を建てたが、古い家はとても良い材木が使われているから壊すのはもったいないと大工が言ったので、何かに使えるかもと耐震補強して、トイレと風呂もリフォームしたな。

「ひょっとしたらそこが使えるかもな」

エル氏の言葉にヨシ氏は、「え〜っ！ どうしてもっと早く言ってくれないんですか。そこをインターンシップ受け入れの場所として使えばいいじゃないですか」

「だけどすごく古い家だし、都会から来る女性たちには敬遠されると思うんだよ」

何気ない自分の言葉にヨシ氏が飛びついたことにエル氏は少し戸惑ったが、ヨシ氏は乗り気だった。

「いやいや、古民家って響きは都会育ちの人には憧れですよ。今度そこに関係者に来てもらって感想を聞きましょう。とくに女性目線の意見がほしいですね。ナイス、ナイス！早速企画しますよ！」

行動の早いヨシ氏はすかさず企画を立てた。そのお話は次回、第8章「一つ屋根の下」へと続く。

インターンシップ受け入れ体制の検討

空き牛舎推進協議会による初めてのインターンシップの受け入れは2018年夏だった。そのときはまだインターンシップについて本格的な検討をしておらず、とりあえずヒデ氏の自宅の離れを宿泊場所として、2名に愛知県に来てもらった。そしてヒデ氏の牧場の作業を体験してもらうとともに、愛知県の県営育成牧場を訪問したり、精液配布や購買推進など愛知県酪農農業協同組合の仕事に同行してもらったりした。このときの経験をもとに、日本獣医生命科学大学からの要望を受けて、本格的なインターンシップ受け入れ体制を協

議会メンバーで詰めていった。

- ・まず事務局が窓口となり、応募してきた学生が何を一番学びたいか、将来どのような職業選択を考えているのか、などをリサーチする。
- ・事務局がまとめた内容を酪農家に情報提供して、作業受け入れが可能な農場や体験内容を整理する。
- ・受け入れ期間は最低でも1週間とし、1農家だけでなくできるかぎり複数の農家での作業を体験してもらう。長期間になる場合は、1週間に1日は休日を設ける。
- ・滞在期間中に酪農に関係するイベントや講習会などがあればカリキュラムに組んだり、県酪協や行政の仕事も知ってもらったりする。

こうして2019年3月、4人の女子学生を愛知県に迎えることで、エル氏の古民家を拠点としたインターンシップ受け入れが正式にスタートした。

今どきの学生は？

協議会ではこれまで七つの大学から27名の学生を受け入れた（2019年度実績）。学生達は皆牧場での作業に積極的に取り組み、いろいろなことを学ぼうと明るく元気に過ごしてくれた。夜には古民家に協議会のメンバーも呼んで、いろいろな話で盛り上がった。

ヨシ氏はインターンシップが終わってからも、メールのやり取りをとおして学生達と交流を続けた。学生達は自分の思いをさまざまにメールに連ねた。

「人に対して何か影響を与えるということはすごいことだと思います。周りの人を巻き込んだり、酪農のことをあまり知らない人に酪農について知ってもらったり。私もそんな人になりたいです」

「私がこんなに動き回っているのは、昔から私が自分のためになりそうなことはしていこうと思うタイプだからです。しかし、いろいろ経験するたびに自分の欠点ばかり見えてきます。欠点が見えてくると自信がなくなり悲しくなります。でも、今のうちに気づけてよかったと思うようにしています！」

「就活とか恋とか、本当に後悔するような道には行かないようにしないとかなと思ってます。私は行動力がある反面、慎重性に欠けるところがあるんです。それで後悔しないように気をつけないといけないと思っています」

「私の中で、消費者意識を変えることは酪農家になっただけでできないと思っていた部分があるのかもしれませんが。でもそんなことないですよ。やり方次第、自分次第で酪農家になってもやれるなと気づきました。酪農家でもいろんなことができるんだぞー！っていうことを自分が体現するのもいいかも」

そこから見えてくるのは、将来に悩み、恋に悩み、酪農を愛する素の姿だった。

ヨシ氏は古民家での夜、エル氏のさまざまなアドバイスを聞く、ある女子学生の輝いたまなざしを思い出した。それは協議会のメンバーをして、彼女を積極的に応援してあげたいという思いを抱かせる輝きだった。

ヨシ氏は彼女へのメールにこう書いた。

「あなたは一生懸命。きつい、汚いを感じず体を使うことをいとわない。あなたはきっと成長する。応援してくれる人が現れる。一生懸命やる者を妬むような職場環境だけは避けたほうがいい。損得なく一生懸命やれること。それだけで自然にあなたの道が拓けてい

くように思います」

エル氏の基準

ある日エル氏は、行きつけのお店で酒を飲みながら、インターンシップの3名の女子学生と歓談していた。

「君達彼氏いる？」

と露骨に聞くエル氏に「それセクハラです！」と学生達は笑いながら答えた。

「じゃあ、いてもいなくてもよいけど、結婚しようと思う相手の失敗しない選び方知ってる？」

その言葉に学生達は、

「え〜っ、聞きたいです〜！」

と、今度は乗り気になった。ちょっと気を持たせながらエル氏は持論を述べた。

「それは自分の基準を持つことだ。例えば家を買うとき、選ぶ基準があるだろ？ 価格とか、間取りとか、立地とか、デザインとか。結婚って人生を左右するほどの買い物だと思うわん？なら当然自分の選ぶ基準がなきゃおかしいだろ？」

学生達のうなずきに満足したエル氏は続けた。

「見た目、フィーリングが合うからとか抽象的な理由ではなく、より具体的な基準があるべきだ。俺が今までいろいろな人の結婚を見てきて、失敗するパターンとうまくいくパターンの研究から、間違いないと核心を持った基準があるんだ。三つあるが、どうかわかるか？」

「一緒にいて落ち着く人かな？」

「価値観が近い人が良いですね」

「え〜何ですか？ 早く教えてください！」

それはね、とエル氏は言いかけて、

「やっぱ明日の朝も実習早いから、君らが帰っていく最後の日に話すことにするわ」

と大きな声で笑った。

「ダメです。そこでやめるはひどい！ 聞かないと今夜寝られません！」

こうして学生達との夜は、いつも楽しく更けていく。仲間を大切にするエル氏にとって、これもまたインターンシップ受け入れのメリットと思われた。

ところで、エル氏の三つの基準とは？

(エル氏)「ハハハ。読者の皆さんもぜひ愛知に来てください。酒を酌み交わしながら直接伝えたほうが心にしっくりくると思います！」

インターンシップ生受け入れ継続

「体重が3kg減ったよ」

最初のインターンシップ期間が終わってから、エル氏はヨシ氏に言った。

「学生が体調不良だったりすると心配で、こう見えて結構気を遣ってるんだよな。正直、今まで規模拡大や新規事業に奔走していて、若者を育てるとか、子ども達に牛との触れ合いの場を作るとか、そういったことは苦手だったし面倒くさいと思っていた。事務局がここまでお膳立てしてくれるという前提はあるが、学生の受け入れを今後も続けたいと思う。」

ただ、従業員達からやめてほしいと言われたらどうしようかと思った。そうしたらやつらが、すごく刺激になるので続けてください、と言ってくれたんだ。農場のことはどんどん下の者に任せていくが、インターンシップは俺の担当、いや生き甲斐としてやっていくつもりだから、ヨシ氏も付き合ってくれよ」

そんなエル氏の言葉を聞いて、ヨシ氏は嬉しかった。牛の管理や日々の作業、農場の経営のことなど考えることがとても多く忙しい日々の中で、直接自農場に関係すること以外で、自ら積極的に体を動かしてくれる酪農家は多くはない。優秀な人材を求めて、自らアクションを起こす酪農家がもっともっと増えてくれれば、とヨシ氏は心からそう感じた。

エル氏は続けた。

「そもそも、今の若い連中が何を考えているかも知らずに求人していて、良い結果が得られるわけがないよな。それに外見上、農作業やれるの？ と思うような都会の学生が、こんなにも一生懸命作業を覚えようとして、糞やほこりにまみれてやるとは思っていなかった。正直驚きであり嬉しかったんだ」

インターンシップをとおして、学生達にいろいろな経験をしてもらうだけでなく、協議会のメンバーが学生達から学ぶことも多い。百花繚乱。協議会の活動が酪農業界にさまざまな花を咲かせることにつながるのではないかと、ヨシ氏は改めて思った。

《つづく》

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

第8章 ひとつ屋根の下

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会

序文

空き牛舎有効活用推進協議会は、2020年でその活動が5年を経過しました。どのような組織においても、活動のマンネリ化が課題になることがあると思います。

しかしこの協議会の活動の根幹には、愛知県の酪農を元気にするという共通目標があり、いわばひとつ屋根の下でそれに賛同する人々が意見を出し合い、実際に動いていくというところにその魅力があります。そこからはマンネリ化というものは発生しないのかもしれませんが。

いや、仮にマンネリ化するとして、それは大河の流れのように目には見えなくても、多くの人の力が集まり、愛知県の酪農が確実に前に動いていることを意味するのではないのでしょうか。

これは、その活動の範囲を広げている協議会が、原点を忘れることなく、関係者が一丸となってこれからの愛知県の酪農を盛り上げていきたい、そんな思いを物語にしたものです。

(舞台：愛知県半田市)

ひとつ屋根の下

ここ最近是比较的暖かい日が続いていたが、その日の夜はしんしんと冷えた空気が戸外に張り詰め、澄んだ夜空にたくさんの星が瞬いているのが見えた。そんな2月のはじめ、とある古民家の一室で、5人は鍋を囲んで愛知県の酪農のこれからのことを語り合っていた。

これまで5人といえば、エル氏、ヒデ氏、ヨシ氏、マル氏、キヨ氏のことであったが、このときヒデ氏とマル氏はおらず、代わりにミカ女史、サク女史という新たな華が加わっていた。空



イラスト：愛知県刈谷市 清水牧場 宮田彩可

登場人物

エル氏：愛知県半田市の大規模酪農家（乳肉複合経営）。空き牛舎有効活用推進協議会誕生の立役者。「兼業農家」第1号を生み出す。

ヒデ氏：愛知県西尾市の大規模酪農家。最年長者として幅広い知識と経験から関係者間の調整を担う。

ヨシ氏：空き牛舎有効活用推進協議会事務局。かじ取り役として協議会を牽引。

マル氏：ヨシ氏の相談役として協議会運営をサポート。

キヨ氏：協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。

き牛舎有効活用推進協議会の活動が、確実に広がりを見せている証拠だった。しかし活動の広がり人は人だけではない。新たな取り組みもまた始まろうとしていた。

「今は酪農経営を家業とは考えていない。自分の牧場をこれからの若い人にとって働きやすく魅力ある職場に改善して行って、新しい風をどんどん取り込んでいきたいんですわ。そんな動きが広がれば、新しく酪農に関わる人も増えてくると思う」

空き牛舎を活用した新規就農第一号の誕生を有言実行したエル氏の言葉には説得力がある。それを聞いたヨシ氏は、食べていたおでんの皿をテーブルに置くと、満足げに頷いた。

「それこそ『働いてみたくなる牧場プロジェクト』の目的なんですよ。今度女子大生4人が愛知県に研修に来るので、エル氏の牧場をこのプロジェクトの最初のモデルにして、若い女性にとって働きたくなる牧場とはどういうものか、エル氏の牧場をどのように変えていくといいのか、いろんなアイデアを出してもらおうと思っています。この古民家も、そういった人達を受け入れる宿泊施設として考えているんです！」

熱く語ったヨシ氏だったが、若い女史2人にはほかのことが気になったらしい。

「そのギターはなんですか」

サク女史は新人の遠慮など微塵も見せずにそう問いかけた。そのときヨシ氏はギターを肩にかけていた。エル氏とキヨ氏には珍しくない光景だが、確かに明らかな違和感がそこにはある。

「君を口説くためだよ」

ヨシ氏も会話の流れを汲まないことには長けている。ミカ女史の冷たい視線には気づかないままそう言うと、おもむろにギターの弦を弾いた。

——命を語ることは重たすぎるね……

ヨシ氏は八ヶ岳でのかつての栄光に酔いしれているようだった。エル氏は苦笑いしつつも、コップにジャック・ダニエルを注ぎながら「ギターの音量を落としたほうが、歌詞の想いが相手に伝わりますよ」とヨシ氏への同調を示した。冷静な判断と対応が必要だと感じたキヨ氏は、「エル氏の牧場改善の取り組みには共感します。とくに牧場の顔にもなる事務室はまず第一に手がけてほしいですね。明るい、きれい、おしゃれをキーワードにしてみてください。それにこの古民家も雰囲気があってとても良いと思います。ぜひいろんな人に来てほしいですね」と、話を戻そうとした。

しかし「この建物は鍵をかけることができないから、それだけが心配なんですわ。とくに女性が泊まる場合は」というエル氏の一言に、再びおでんを手にしていたヨシ氏がおでんではなく、話のほうに喰いついた。

「そんなの気にする必要があるかなあ」そう言いながらも、何かを思い出したかのように続けた。

「でも言われてみれば、以前女性と2人きりで登山に行ったとき、さすがに一緒にのテントで寝るのに遠慮があったから、その女性には車の中で寝るよう言ったなあ。鍵もかけられるから安全とも。でも向こうから、1人だと不安だから一緒にのテントで寝させてください、って言われたからそうしたけどね」

と、いつのまにかのろけのようにになっている脈略のない話をした。「ええーっ！」と大声で驚くエル氏を横目に、サク女史が「別にいいんじゃないですか」

さらにはミカ女史も「私もアリですね」と続けた。それには、「えっ、ええーっ！」と

いうエル氏の二度目の声が悲鳴のごとく部屋に響いた。

「別にまずいことなんて何もないですよ。同じ屋根の下で同じ空気を吸っていたというだけでしょ」平然と言い切るヨシ氏に「その言い方がいやらしい……」エル氏は言いかけたが、サク女史がそれを遮るように「そりゃそうですよねえ」とヨシ氏の話の継いだ。

「もし自分が行きたい所だとかやりたいことがあったら、相手が誰であろうといいんじゃないですか。異性だろうと泊まりだろうと」

「いや、男女ってそんなもんじゃないでしょう。しかもあなたがたは結婚されている……」

声を上げさせながらエル氏は言ったが「きっと最初からやましいことを考えているから、そういう意見になるんですよ」と、サク女史に痛いところを鋭く突かれ、たじろいだエル氏はそれ以上の言葉を出せず、ただうつむくしかなかった。正面に座っているキヨ氏に助けを求めて視線を送ってはみたが、キヨ氏はエル氏とサク女史のやりとりがツボにはまったようで、お腹を抱えて笑っているだけだった。

外の冷たい空気とは隔離され別世界のように暖かい部屋には、鍋から立ち上る湯気とともに混沌が充満していた。ある者には当たり前の日常の、ある者には夢のような非日常の話題を同じ土俵で論じ合い、5人が5人それぞれの想像の世界の中で、自由気ままに楽しんでいるという混沌。

しかし混沌の中にも正解はある。そして正解は一つとは限らない。そのことに気づかせてくれたのは、これまでも途中ではハンドル操作を誤りながら、最終的には空き牛舎有効活用推進協議会を目的地まで導いてくれたヨシ氏の一言からだった。

「ちょっとこの鍋をさらえませんか」

本来の話題からずれてすでに相当の時間が流れ、ヨシ氏が鍋に投入したうどんには手がつけられないままのびきっていた。おでんとモツと餃子と焼売とうどんという五つの異なる食材がとろけるように混じり合いながら渦巻き、鍋の中に混沌を作り出していた。

せっかくヨシ氏が買い出しから調理までしてくれたことに配慮などせず、女史達は「もうお腹いっぱい」「なんかどろどろー」と苦言を呈したが、ヨシ氏はかまうことなく4人の皿にうどんその他諸々を盛りつけた。

ダイエットを気にしているエル氏はほとんど口にできなかったため気づかなかったが、キヨ氏はそれをありがたく頂戴しながら思った。確かに見た目ではおでん、モツ、餃子、焼売、うどんの見分けはつきにくくなっているが、口にしてみれば違いはわかる。食べ物に人それぞれの好みがあるように、5人いれば五つの正解があってもおかしくはない。これこそが協議会活動の原点ではなかったか。

キヨ氏は1年前、協議会で行った池袋の夜のことを思い出した。あのとき街にはさまざまな色の光が溢れ、多くの人で賑わっていた。そのときキヨ氏が感じたのは、人々が集まって一つの街が形成されるように、酪農に対する個々の思いが合わさった集合体こそが、空き牛舎有効活用推進協議会だということだった。

「この古民家、そしてこの愛知県が始まりの場所になるんですね」

それまで黙ってうどんその他諸々を食べていたキヨ氏の突然のつぶやきに、その意味がわからない女史達はきょんととしていたが、エル氏とヨシ氏がすぐに反応した。

「始まりの場所は浜中町じゃないの」

「いやいや、池袋が始まりの街でしょう」

どれもが正解だった。空き牛舎有効活用推進協議会の活動は、4年前に大自然が広がる北海道の浜中町から始まった。その後さまざまな関係者を巻き込みながら、2年をかけて大都会東京の池袋にたどり着き、一つの節目を迎えた現在、協議会活動は次の局面に向けて動き出そうとしていた。

これまでとは違う5人が今、ひとつ屋根の下にいる。メンバーは違えど、そしてそれぞれの立場は違えど、愛知県の酪農という大きな屋根の下に皆が集い、新たなことを始めようとしている。

愛知県には北海道のような牧歌的な風景はない。また東京のように眩しいほどの喧騒もない。しかしほど良い都会でもあり、ほどよい田舎でもある愛知県には、愛知県なりの酪農の良さがある。それを具体的な形にしていくことが、これからは必要なのだ。

人の暮らしの真ん中でこそ、愛知県の酪農が輝く。

そんなフレーズがキヨ氏の頭に浮かんだ。

＊

次の日の朝、ヨシ氏は1人昨夜の宴の名残を片付けていた。協議会の事務局としての責任感から、古民家ででの宿泊の快適度を知りたくて、皆が帰った後もヨシ氏は1人残ったのだった。

「以前協議会で八ヶ岳に行ったときも、自分1人で準備も片付けもしたな」

鍋を洗いながらそんなことを思い出したが、今となってはいい思い出だった。

ヨシ氏は、持ち込んだ荷物を車に積み込むため、土間から外へ出た。目の前には広い庭があり、塀はないまま路地を挟んで民家が立ち並び、その集落を抜ければ昨日買い出しをしたスーパーがすぐ近くにある。まさに「便利な田舎」がそこにはあった。朝日に照らされた庭の地面からは土のぬくもりが感じられ、まだ春の気配はその姿すら見えないが、必ず春はやってくるという事実をヨシ氏はあらためて噛みしめた。

後ろを振り返ると、昨夜5人で楽しいひと時を過ごした古民家がある。ふと昨日のキヨ氏の言葉が思い出された。ここが始まりの場所になる……。ヨシ氏は近い将来、ここに酪農を愛する多くの人達が集い楽しんでいる光景を想像した。

《つづく》

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

第9章 学生との交流から 生まれる力

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会

空き牛舎有効活用推進協議会では、インターンシップの受け入れを始めてから、学生達とたくさんの意見交換をしてきた。また、学生達を楽しませ、さらには愛知県の酪農にとっても有益になるような取り組みを企画してきた。



イラスト：愛知県刈谷市 清水牧場 宮田彩可

働いてみたくなる牧場作りプロジェクト

インターンシップの受け入れ継続を決めたエル氏は、これまでには考えたことのなかった「若者を育てていく」という思いが芽生えた一方で、都会から来る若者の目に自分の牧場はどのように映るのだろうかという疑問、もっと言えば不安を感じていた。自分は経営のために、また地域の酪農のために優秀な人材をほしいと思っているが、そもそも自分の牧場は、それを受け入れるにふさわしい場所なのだろうか。

「せっかく東京の大学からインターンシップに来てくれるのだから、じゃあ君達はどんな牧場になら就職したいと思うのか？ということ聞いてみたい。今は人材難なわけだから、そこに近づける努力を自らすることも必要だろう」

エル氏はヨシ氏にそう言った。その言葉に共感したヨシ氏は、さっそく企画を練った。

「まずはエル氏が、自分で改善したいと思っている点、インターンシップの学生に聞いてみたい点をまとめてください。それをもとに学生にいろいろなアイデアを出してもらって、意見発表をしてもらいましょう」

日本獣医生命科学大学の3名の学生に、2週間の滞在期間中に意見をまとめてもらうようあらかじめ伝え、インターンシップ最終日の前日の夜、エル氏が経営する焼き肉レストラン「黒牛の里」で、発表会、討論会を開催した。その内容は、牧場の外観の第一印象、作業がしやすいレイアウトになっているか、従業員達の雰囲気はどのようなか、などハード面、ソフト面について

登場人物

エル氏：愛知県半田市の大規模酪農家（乳肉複合経営）。空き牛舎有効活用推進協議会誕生の立役者。「兼業農家」第1号を生み出す。

ヒデ氏：愛知県西尾市の大規模酪農家。最年長者として幅広い知識と経験から関係者間の調整を担う。

ヨシ氏：空き牛舎有効活用推進協議会事務局。かじ取り役として協議会を牽引。

マル氏：ヨシ氏の相談役として協議会運営をサポート。

キヨ氏：協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。

てさまざまな内容となっていた。

「通路に水が溜まっている場所がある」

「駐車場のスペースがもっとほしい」

「作業中すぐに入れるトイレが近くにないと良い」

エル氏にとって耳の痛いような意見もあったが、皆が正直な気持ちを言ってくれたことがエル氏には嬉しく、またこれまで思いもしなかった細かい点に気づかせてくれたことに感謝した。

「これをいかにして経営に活かすか、それこそ経営者の腕の見せどころですよ」

ヨシ氏はそう言ってエル氏の肩を叩いた。

都市型酪農の未来フォーラム

ヒデ氏は従前より都市近郊酪農という考えを大切に、それを常に実践しようと努めてきた。それが形になったものが、エコフィードの有効活用と6次産業化だった。日本獣医生命科学大学、東京農業大学の学生達がインターンシップに来たとき、ヒデ氏のTMR製造施設の見学とチーズの加工体験をしてもらった。

「おからは聞いたことがあるけど、モナカなんかも飼料に混ぜるんですね」

「チーズは初めて作りました。こんなにきれいに割けると、なんか感動しますね」

学生達は初めての知識や経験に、屈託のない笑顔を見せた。

「なぜ愛知県ではエコフィードが盛んなのか、わかるかな？」

ヒデ氏が問いかけると、皆首を傾げた。

「愛知県は都市化が進んでいて人口も多い。それはつまりいろいろな産業が集まってくことを意味するんだ。食品産業もその一つ。また昔から海運も開かれていて、とくに知多半島では醸造業が盛んだった。そういった産業から出てくる食品製造副産物を有効利用しようと、酪農家達は知恵を絞ってきたんだ」

「食品製造副産物を利用するうえでの課題はありますか」

そう聞く学生に、ヒデ氏は答えた。

「一番は、水分が多いから保存できないことかな。そのためには発酵飼料にするという方法もあるんだよ」

そんなヒデ氏の説明に頷きながら、学生達は6次産業化についても質問した。

「6次産業を始めようとする、初期投資が必要だし、自分で商品を買らなければいけないから、難しいことが多いんじゃないですか」

ヒデ氏は地域の酪農家と合資会社「酪」を立ち上げ、チーズやアイスクリームなどの加工品の製造・販売に取り組んでいる。チーズは名古屋駅近くの繁華街に構えるチーズとワインのお店にも商品を提供している。学生の質問にヒデ氏は「そのとおり」と言いながら、6次産業化に取り組むうえで自ら心掛けていることを話した。

「6次産業は $1+2+3=6$ ではなく $1\times 2\times 3=6$ だけど、なぜ掛け算であるかわかる？それは1が0になってしまうと全体も0になってしまうからなんだよ。6次産業をやるにしても、まずは酪農部門がしっかりしていないとダメ。そのことは常に自分に言い聞かせている」

その言葉を聞いたエル氏も、自らの考えを述べた。

「焼き肉屋『黒牛の里』を始めてもう20年になるが、焼き肉屋はお客さんがちゃんと来てくれれば儲かる！とはいえ、お客さんをいかにコンスタントに呼び込むのかなど、6次産業を続けるのはとても大変。販売することは生産することの10倍の労力がかかるとも言われている。でも酪農や肥育経営は素晴らしい仕組み、先人が築き上げた仕組みが整っている。つまり、搾った乳はバルクに入れておけば別の者がそれを間違いなく売ってくれる。肉牛も同様。こんな恵まれた業界はないと思う。6次産業で失敗する事例も多いけど、やはりやり方次第だ」

都市近郊酪農には、畜産環境の問題や地価が高いこと、暑さの問題など課題が多いことも議論しながら、学生達は愛知県の酪農の良さを、少しは感じ取ってくれたようだった。

「持続可能な社会が叫ばれるなか、では酪農では何ができるか。これからの課題だよ」

ヒデ氏は自らに言い聞かせるように、学生達にそう言った。

空き牛舎ベンチャー企業プロジェクト

～あなたならどんな牧場を作る？～

「空き牛舎有効活用推進協議会では、空き牛舎を活用した「兼業農家制」による新規就農を推奨しています。昨今は医療の発達で寿命はどんどん延びており、人生100年時代と言われています。定年が70歳まで延びたとしても、定年後の人生は30年もあり、定年後もやりがいを持って日々を過ごせるか？生活していくのに十分な年金がもらえるか？また、食料自給率が低い日本で、もし海外からの食料の輸入がストップしてしまったら……などを考えると、将来的な不安は尽きません。そこで、幸せな未来に向けて、これまでの固定観念を捨てて、農業の多様性を考えてみたいと思います。あなたなら、兼業農家制で取得した空き牛舎で、どんな経営を目指しますか？自由な発想で考えてみてください」

インターンシップの学生に先生も加わった新たなプロジェクトの冒頭、ヨシ氏がその趣旨を説明した。口火を切ったのは先生だった。

「やはりまず必要なのは金銭面でしょう。経営モデルのようなものは皆さん何か考えていますか」

するとエル氏が、待っていましたとばかりに説明を始めた。

「じつは普及員さんと一緒に、兼業農家制における経営モデルを考えてみたんですわ。資料にまとめたので見てみてください」

資料は普及員が作成したが、エル氏は資料を使って説明することに慣れていないようで、結局は資料から逸脱しながら持論を展開した。

「今考えているのは、和牛繁殖雌牛60頭の繁殖経営から始めるというもの。これくらいの頭数が、このあたりの牛舎の平均的な規模だし、兼業でやれる頭数でもある。飼料費なんかもしっかりと計算したうえで所得をはじき出すと、650万円くらいは見込める。これプラス配偶者の所得があれば、十分な金額となるんじゃないかな」



メモをとる学生を見ながら、エル氏は続けた。

「あと、自分はF1の1産取り肥育にも興味がある。
いや、興味があるどころか実践もしているんだ。F1に
和牛受精卵を移植して和牛子牛を生ませて、搾乳もし
てみた」

「F1も搾乳をするんですか」

そう驚く学生にエル氏は答えた。

「じつは周りから搾乳しても乳量は少ないと馬鹿にさ
れた。実際少なかったし牛も暴れたからうまくいかなか
ったというのが正直なところだ。でも乳量に関してはしっかりしたデータはないし、チャレ
ンジすることに意味があると思っているよ。1産取り肥育は北海道なんかでも大規模農場
がやっているし、今後も注目していんじゃないかな」

そんな活発なやり取りを引き金にして、学生達からはさまざまな意見が出された。

「近くの学校とコラボして、給食に牛乳寒天を提供したり、生乳を家庭科の調理実習に
使ってもらったりしたらどうですか」

「糞尿の処理が一番難しいですよ。ちょっと飛躍しすぎですが、牛の糞で紙を作るな
んてこともできますね」

「これからの時代、農福連携はいいんじゃないですか」

「いろいろな種類の牛を飼って牛乳の飲み比べとか……」

「スマホ依存の子を酪農体験で改善させる。ほかにも医療とのコラボも考えられます」

「農場体験でダイエットをうたって人を呼び込む！」

なかには突拍子もない意見もあるが、それをきっかけに議論が進むことも多い。

「糞の有効活用といえば、先日、テレビで奈良公園の鹿のことを放映していた。1200頭
も鹿がいて、糞を処理しているわけではないのに、公園には糞が落ちておらず綺麗に保た
れているのは、フンコロガシのおかげだという内容であった。昆虫の力を借りられたら良
いなと思う」

そうエル氏が言うと、

「漁業をはじめとして、昆虫飼料は今後きっと出てくる話だと思う。小規模農家では昆
虫と糞尿処理を組み合わせると面白いかも。今後調査してみたい」

と、ヨシ氏が話を膨らませていった。

また、ある学生が、

「牛だけじゃなくて、家の残飯を食べてくれる動物も飼いたいな」

と言うと、ヒデ氏が「残飯ではないが、食品製造副産物なら、豆腐粕、おから、酒粕、酢粕、
醤油粕などいろいろ使っているし、人参の皮は知的障害の方の施設から毎日200~300kg
を引き取っている。また、ソフトクリームのコーン、実はこの製造は、西尾市と隣の碧南
市で全国トップのシェアだが、それを飼料にして資源循環に貢献しているし、それが都市
近郊酪農の一つの生き残る道かと思う」

こういった議論は酪農家だけではなかなかできない。若い人たちのアイデアがあってこ
そのものだと、ヨシ氏は皆の話を聞きながらそう思った。



母校自慢大会

夏休みに入る直前、県内の高校生（2年生）から日帰りの実習希望があった。その高校は有名な進学校で、ヨシ氏はどうしてまた酪農の実習を希望するのかと疑問に思った。聞いてみると、獣医志望であり牛が好きなので、部活の仲間で有志を募り酪農体験することで、牛乳や牛肉がどのように生産されるかを学びたい、そして自分達でできる生産者を応援する方法を考えたいということだった。友人らを巻き込んでまで酪農を応援してくれるのはとても嬉しい、とヨシ氏はとっておきの実習メニューを組んだ。

牛好きnet愛知（牧場従業員の孤立を防ぐため、仲間作りを目的に、県内の若手酪農家を中心に従業員、学生、獣医師などが集まるLINEグループ）のリーダーH君に相談しバーベキューを開催。ちょうど愛知県に来ていたインターンシップの大学生にも参加してもらった。そして大学生には、在籍している大学がどんなところで、自分がどんな学生生活を送っているかを話し、最後にわが校をぜひ受験して！とアピールさせた。さらに集まった従業員達にもそれぞれの母校の自慢話をしてもらった。

その後、高校生達にはさらに詳しく話を聞きたい人のところに行って、情報収集してもらった。一番人気は、やはり年齢が近く大学の最新情報を持っている現役大学生だった。高校生達にとっては、貴重なひとときとなったであろう。また質問された大学生達も、自分がどんな志で大学へ入ったのか、そして今の自分はどうかを見つめ直す機会となり、有意義な実習となった。

このように、空き牛舎有効活用推進協議会では、インターンシップ生の受入れによって、さまざまな活動を展開することができた。それは、未来を担う学生との交流から新たな力が生み出されてきた結果だった。

「やはり若者の集まる産地じゃなきゃダメだな～。凄いエネルギーを感じるわ」

エル氏はしみじみと言った。ヨシ氏は、

「これからも若者が来なくなる産地にしていかなくちゃいかんですね」

エル氏にそう言うと、エル氏は、

「だから頑張ってるじゃないですか」

と笑った。♫

《つづく》